

第6学年 社会科の実践

1 単元名 「戦国の世から天下統一へ」(全7時間 本時6時間目)

2 単元目標

○信長、秀吉の業績を中心に、全国統一までの動きを捉える。
○江戸幕府が始まり、身分制度が確立して武士による政治が安定したことを捉える。
○小田原地方を治めていた北条氏について知り、興味・関心をもって身近な歴史的事象について追究しようとする。

3 「ひびき合う三の丸の子どもたち」にせまるために

研究課題・・・子どもが解決したい問題を持ち、友だちとひびき合いながら学習する子どもの育成
手立て・・・子どもの願いや思いの育ちを見とった単元構想と授業づくり

高学年ブロックテーマ

「仲間への理解、自立する自分」

・仲間を理解しつつ、自分の思いも大切に作る姿 ・新しい価値観にふれ、自分を再構築する姿

<聴く・話すについての指導>

「聴く」については、仲間の意見や説明に対して「なるほど」「ああ、そういうことか」といった「温かい反応」ができる児童が発言した児童を気持ちよくし、「それっておかしくない?」「でもそれってさ…」といった「批判的な聴き方」が学習を深めていけるようにしたいと願って指導を重ねている。そんな中、数名ではあるが、「温かい反応」「批判的な聴き方」をしている児童がいる。彼らのつぶやきを拾って価値づけ、広げているところである。

「話す」については、まだ黒板や担任に向かって話してしまう児童もいるが、徐々に誰に話しているのかを気にし始めている雰囲気ができはじめ、「こっち見て話してよ」といった声が聞かれるようになっていく。話し手の声の大きさや話す順序などの話し方については、十分相手意識をもって行っているといえる児童は少ない。そのため、よい話し方を取り上げて気づきを促す形で話し方の指導を行っている。また、考えはもっているのにうまく話さなければというプレッシャーに伝えることを阻害されているような児童もいるため、休み時間のように安心して話せる雰囲気づくりも大切にしているところである。

<これまでの関わり合い・ひびき合い>

「ひびき合う三の丸小学校」という本校の合い言葉を意識している児童が多いが、「考える」「聴く」「伝える」「関わる」と整理すると「伝える」に課題がある。学級全体での話し合いとして、代表委員会や行事に関わるものを経験してきたが、意見を述べない児童の姿が気になった。話し合いが終わった後で、「本当はこう思ったんだ」と知らせに来る児童もいる。「恥ずかしい」とか「誰かが言うてくれるだろう」とか、あるいは、「私はそういうキャラじゃないから」といった個々の思いはあるだろうが、刺激していきたい。

一方で、解決したい問題がはっきりしているときは、環境を整えることで多くの児童が自分の考えを述べることもできたこともわかった。例えば、初めてのなかよし班活動やなふれあい給食などの準備について、班ごとに相談する場面では、普段はほとんど発言のない児童も考えを述べていた。

これらのことは、学習場面でも同じことがいえる。算数の「文字と式」で、小グループで問題解決を行ったときには、大きめのホワイトボードを一つずつ用意することで、そこに頭を寄せて説明したり質問したりして解までのプロセスをいくつも見いだすことができていた。この時間がきっかけで、文字と式の学習がおもしろくなったという児童もいた。また、学級全体で一つの問題を解決するような場面においては、みんながわかったといえるまで、複数の児童が言葉をつないだり言い換えたりしながら学ぶ姿には成長を感じる。

できるだけ明確な問題を設定し、ひびき合いやすい環境を整えることで、より多くの児童が「伝える」壁を乗り越え、ひびき合うことのよさを実感し、他者の見方に触れることで自分の考えを再構築することにつながるよう努力しているところである。

4 単元と指導について

<単元について>

学習指導要領によると、織田・豊臣による天下統一、江戸幕府の始まりと武士による政治の安定について分かることとされている。扱う人物としてはザビエル、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、徳川家光が例示されているが、児童の興味・関心を重視し、取り上げる人物の重点の置き方に工夫を加えるなど、精選して具

体的に理解できるようにするとされている。

信長は新しいものを取り入れ、政治に生かそうとした。大量の鉄砲を導入した長篠の戦いやザビエルの伝えたキリスト教の保護、スペインやポルトガルとの南蛮貿易である。さらに、全国統一をめざす根拠地とした安土城の城下では楽市楽座を行い、商工業の発展にも努めた。

秀吉は低い身分から身を立てた武将で、信長の家臣として仕えた。本能寺の変で信長を倒した明智光秀を討ちた後、大阪城を築き全国統一をめざした。太閤検地や刀狩りを行い、兵農分離政策を進めた。また、勢力が大きくなると、惣無事令を出し他の大名の勢力争いを牽制するなどした。そして、関東で大きな勢力を誇った小田原北条氏を倒し、全国統一を果たす。その後も朝鮮への出兵するなど野心家であった。

家康は信長、秀吉に仕え、全国統一を家臣として支えたが、秀吉の死後、関ヶ原の戦いで豊臣氏を滅ぼし、この後、260年に及ぶ江戸幕府を開いた。江戸幕府の政治や江戸のまちづくりには信長や秀吉のものだけでなく、小田原北条氏の政策やまちづくりが生かされた。

本単元では、これらの内容に加えて小田原北条氏の業績を扱う。児童の住む小田原の礎を築いた北条氏について学ぶことで、その当時の人々の思いや願いに触れていく。また、小田原が戦国時代に大きく関わり、全国統一の最後の砦であったことを知ることは、まちの歴史を知り、まちを愛する心情を育てることにつながると思われる。

ここでは、小単元を「戦国の世から天下統一へ」とし、北条氏を中心に、戦国時代を学ぶ。そのあと、秀吉をきっかけに、信長、家康、江戸幕府の治世についての学習への展開を予定している。

北条氏は当時小田原城主だった大森氏を倒すと、早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の5代、約100年にわたって小田原城を根拠地として関東を治めた。武力によって支配するという考えが主流だった戦国の世にあって、北条氏は「禄壽應穩」（領民の財産と命が穏やかであるように）、「万民哀憐、百姓尽礼」（万民を哀れみ、百姓に礼を尽くすべし）といった理念をもって領地を治めた。目安箱によって領民の声を聴くことや評定衆による話し合いのようなくみは当時には珍しい民主的な手法である。また、検地を行い、税金を四公六民まで引き下げたり、飢饉の時には徳政令を出したりするなど民衆の心をつかむことにも成功している。さらに、各地から様々な職人を呼び寄せて住ませたり、六斎市を開いたりして商工業の発展にも努めた。大工町や青物町など、今の地名にもその名残がある。さらに、武士と領民が別れて暮らすのが当たり前だったこの時代に総構で城下町全体を囲んで領民とともに小田原を築き上げてきたのが北条氏である。群雄割拠する戦国時代に100年もの間あり続けた理由としては、戦に強かったこと、お家騒動がなかったことなどが挙げられるが、その政策については後の江戸幕府や他の武将も取り入れたものが数多くあった。その名残は、板橋や荻窪といった今の東京の地名にも残っている。これらのことから、応仁の乱で民衆の苦しむ姿を目の当たりにした伊勢勘九郎（当時の早雲）がつくろうとした国は、領民が安心して過ごせる国だったといえる。その思いに触れることは、児童が歴史を学ぶことに大きな価値を与えられられる。

これらを踏まえ、本単元では、北条氏の政策、まちづくりを捉えるとともに、当時の人々の思いにせまる。その思いが最も現れるのは秀吉を総大将とした豊臣軍に攻められ、小田原城が全国の大名に取り囲まれた時だと考える。このときに行われたといわれる話し合い（小田原評定）には、当時の北条氏政や氏直、その家臣の葛藤が現れたはずである。それまでの学習をもとに、その葛藤に触れることで、当時の人々の思いに気づけるようにしたい。

<指導について>

児童の実態でも述べたように、小田原の歴史に興味があるとはいえない児童の実態ではあるが、学ぶ中で知的好奇心が刺激され、興味・関心を高めていけるようにしたい。そのために、まず、これまでの時代を動かしてきた人物を整理し、「戦国時代を動かした中心人物って誰だろう」という導入を準備した。数多くの武将が戦国時代を駆け抜けたのだということを知ること、時代背景をつかむとともに、有名な武将の中に小田原北条氏がいることに気づけば、少なからず知的好奇心を刺激するはずである。また、今年度の総合では、話し合いで「小田原城ガイドプロジェクト」が立ち上がった。これは、千葉県館山市立館山小学校の6年生との交流を見据えた取り組みだが、「そのためには小田原城や北条氏のことについてもっと詳しく知らなければならない」という必要感が児童の中に生まれている。これも北条氏について学ぶことのきっかけとした。さらに、児童にとって身近な北条五代祭の写真を提示することで、小田原と戦国時代の関係に興味をもつと考える。

これまで、誰が何をしたのか、それはなぜなのか、どんな思いからなのかといった視点で学習を進めてきた。当時の人々の気持ちに寄り添うことは難しいが、その気持ちに気づくことはできると期待している。北条氏が100年もの間、5代にわたって小田原を支配していたという事実から「どうやって100年も支配したのか」「5代ってどんな人たちがいたのか」といった疑問が出てくると考えられる。調べたことを伝え合う中で、その戦い方や政策、国づくりの理念に触れ、北条氏が小田原のまちの基盤をつくってきたこと、この地に住んでいた人々が北条氏をどう捉えていたかということにも気づいて欲しい。資料については、教科

書や資料集にはほとんど記載がないため、「北条五代物語」（小田原市教育研究所）を中心に、書籍とホームページから集めたものを子どもたちが調べやすいように用意する。

児童が、北条氏の政策や戦術、家訓等を調べ、当時としては理想的な国づくりを進めていたことをつかんだところで「小田原城包囲図」を示す。秀吉の命令により全国から集められた大名たちに囲まれている時の図である。そして、その状態が3ヶ月もの間続いたことを知らせる。すると、「北条氏は何をしていたんだろう」「なぜ戦わないんだろう」「なぜ豊臣軍は攻め込まないんだろう」といったことが疑問として浮かんでくるだろう。これまでに北条氏の政治の行い方について調べてきているため、「北条氏は話し合っていたのではないかと予想すると考えられる。

本時では、前述のことから生まれるであろう「北条氏は3ヶ月もどんなことを話し合っていたのかな？」という問題について話し合う。これまで調べてきたことをもとに想像し、交流した意見をもとに、**仲間の考えを受け入れながら再考し、北条氏が勝てそうもない状況の中、「小田原のまちを守りたい」「理想の国を失いたくない」「民衆を守りたい」といった北条氏政や氏直、その家臣の思いにせまる姿**をひびき合う姿とする。

一方で、小田原を攻めた秀吉が「なぜ3ヶ月も攻め込まなかったのだろう」という疑問から、全国統一を成し遂げた豊臣秀吉の学習へつなげていきたい。

また、次の単元で、織田信長や徳川家康について学ぶ中で、江戸幕府の政治や江戸のまちづくりに北条氏の政治や小田原のまちづくりが生かされていることに気づくことで、さらに地元小田原への愛着を深めていくことを願う。

5 単元構想 次項参照

6 本時について

(1) 本時目標 これまで調べてきたことをもとに「北条氏はどんなことを話し合っていたのだろう」について話し合うことで、北条氏の「小田原のまちを守りたい」「理想の国を失いたくない」「民衆を守りたい」といった思いに気づくことができる。

(2) 本時展開

学 習 活 動	主な支援・留意点 ◆評価【観点】
<p>攻めよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手が弱ってきたら攻めよう ・籠城してから攻めよう ・いつもの戦いかたで勝てる ・小田原を奪われるぐらいなら戦う ・奪われたら領民が困る <p>守ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手が多すぎるから守ろう ・籠城していれば大丈夫 ・小田原城は強い城だから ・助けが来るかも ・小田原を渡したくない <p>降参しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6万対22では、相手が多すぎる ・勝ち目がない ・小田原のまちは焼かれないはずだ <p>逃げよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・勝ち目がない ・自分たちだけが逃げれば領民は助かるかも <p>戦わずに</p> <ul style="list-style-type: none"> ・戦わずに何とかしたい ・戦ったら人々が死ぬ ・戦ったら小田原のまちは焼かれる <p>3ヶ月の間、北条氏はどんな話し合いをしていたの？</p> <p>小田原のまちや人々のことを考えて話し合っていたのだろう</p> <p>※補助疑問 「北条氏が一番大切にしていたことって何だろう。」</p>	<p>○小田原城を全国の大名が取り囲み、3ヶ月の間膠着状態が続いたことを思い出す。</p> <p>○学習問題を想起し、書き加えたいことがないか確認することで、自分の考えを明確に持てるようにする。</p> <p>○学習問題について話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ネームプレートで個々の立場をわかるようにして話し合う。 ・同じような意見については、その根拠の幅を広げられるように、意図的に指名してつながりをつくるようにする。 ・出された意見に対するつぶやきを拾うことで児童同士の話につながるようにする。 <p>○「攻める」「守る」「降参する」など、整理して板書することで、その根拠が分かるようにする。</p> <p>○最後に北条氏のどのような思いを感じたか、簡単にまとめる時間をとる。</p> <p>◆これまでの学習をもとに根拠をもって北条氏の話し合い（小田原評定）について話し合おうとしている。</p> <p>【関心・意欲・態度】</p> <p>◆小田原評定について話し合うことで、北条氏の小田原や民衆に対する思いに気づくことができる。</p> <p>【思考・判断・表現】</p>

単元
目標

- ・信長、秀吉の業績を中心に、全国統一までの動きを捉える。
- ・江戸幕府が始まり、身分制度が確立して武士による政治が安定したことを捉える。
- ・小田原地方を治めていた北条氏について知り、興味・関心をもって身近な歴史的事象について追究しようとする。

※いろいろな見方があるが、本単元では、応仁の乱を戦国時代の幕開け、秀吉と北条氏の小田原合戦を戦国時代の終焉と捉える。

○戦国時代に入るまでの流れをつかむ…応仁の乱により、室町幕府が崩れ、戦国時代が始まっていく。

○これまで学習してきた時代を動かしてきた人を整理することで、群雄割拠の戦国時代がこれまでとは違うことを感じられるようにする。

どんな人物が新しい時代を動かすのだろう①

これまでの時代と違い、多くの人物(一族)が現れることを示し、時代背景を捉えられるようにする。

- ・あ、徳川って家康?
- ・織田は信長だよ。
- ・北条氏って小田原のかな?
- ・里見氏って館山小の?
- ・120って多くない?
- ・めっちゃ戦ってたんだね。
- ・下克上とかこわっ。
- ・親兄弟を倒すって殺しちゃうの?
- ・すごい時代だね。
- ・この時代に生まれなくてよかった。

戦国大名の勢力図を示し、戦によって多くの一族が減っていたこと、大名がその領地を支配していたことなどを理解できるようにする。

- 「北条氏について知ってることある?」
- ・北条五代祭り!
 - ・駅に銅像がある
 - ・五代祭りだから5代続いたんじゃない?
 - ・5代ってどれくらい? ⇒100年も!? すげー!
 - ・戦国時代に100年も続くななんてすごい!

「誰について調べていこうか?」

- ・織田とか徳川もいいけど、やっぱりここは北条氏でしょ。
- ・総合もあるしね。

北条五代祭りや銅像の写真を提示して、身近に感じられるようにする。

総合的な学習の時間

千葉の館山小学校の6年生がその地元に住む里見氏という戦国武将のことに興味を持ってガイドブックを作っているらしい。

小田原城に修学旅行に来るらしい。

里見氏は北条氏のライバルだったみたい。

小田原城を案内したい。

北条氏についてももっと詳しく知りたい!

- ・どうして北条氏は100年も続いたの?
- ・強かったんじゃないかな?
 - ・政治がよかったんじゃない?
 - ・家督争いがなかったんじゃない?
 - ・人気者だったとか? ⇒ なんで?
 - ・城下町が栄えてたんじゃない?
 - ・強い武器があったとか? 鉄砲?



- ・5代ってだれがいたの?
- ・最初の人には北条早雲だよ。
 - ・えー、後は知らない。
 - ・北条早雲のこともよく知らないよ。
 - ・5人とも知ってるよ!
 - ・北条氏の5代ってどんな人たちだったのかな?

戦国時代の時代背景をつかむことができる【知】
戦国時代と北条氏について思ったことを話し合える【関】

・100年も続いたのにどうして終わったの?

流れ1 どうして北条氏は長く続いたのかな?②③④

流れ2 北条氏ってどんな人たち?②③④

早雲・氏綱・氏康・氏政・氏直についての資料を用意しておく。

○自分の予想の裏付けとなるものを探したり調べたりして紹介し合う。

- ・戦い方が強かった ← 持久防御 「河越夜戦」「武田信玄との戦い」「上杉謙信との戦い」
城の作りが工夫されていた—土塁、堀、門の作り方
- ・お家騒動がなかった ← 嫡男(長男)が家督を継ぎ、弟たちがそれに協力する体制を作った
(他の戦国大名にはなかった)
- ・町が栄えていた ← 産業が発展した
刀鍛冶(小田原相州)、鋳物師(大砲、鉄砲など) → 戦いも強くなる

一族・家臣との信頼関係

・政治がよかった ←

民との信頼関係

学習感想をもとに

- ・強い戦い方をしていたんだ
 - ・北条氏は小田原の人々に信頼されていたんだ
 - ・まちの人たちのことを考えた政治をしていたんだ
- ⇒うまくいっていたはずなのに、なんで滅びたの？

漁業—水軍としての役割も果たす
 六斎市（楽市）—商人や農民が集まりやすい
 ういろう—今も続いている（25代も続いている）
 二十一箇条の家訓（仏教、学問、儉約、誠実など）
 何事も話し合って決めた（評定衆）—独断ではない
 検地を行い、税金を四公六民とした（飢饉の時は減税）
 百姓に礼を尽くす—百姓を大切にし、感謝しなければ領国は滅びる
 （目安箱、徳政令など）
 虎朱印—禄寿応穩—民の財産と命はまさに穏やかなるべし（民の財と命を守る）

資料を的確に読み取って、北条氏の業績を理解し、長期にわたって小田原・関東を治めることができた理由をつかむことができる。【技】【知】

北条氏の戦い方や政策、評定衆や家訓などにより、家臣や人々との信頼関係を築き、100年もの長い間小田原を中心に領地を守り、広げることができたことをまとめることで、そんな盤石な北条氏が滅びることへの関心を高めるようにする。

北条氏はどうやって終わったの？⑤

この時間の学習問題が出なくても、秀吉による小田原征伐の際の小田原城包囲図を提示する。

- ・北条氏がいろんな大名に囲まれてる
- ・北条氏が攻められているんじゃない？
- ・徳川家康がいるよ
- ・織田って信長？
- ・海からも攻められてるよ
- ・やばくない？
- ・秀吉だけめっちゃ速くない？
- ・本陣で書いてある
- ・秀吉が北条氏を攻めてるんだ！

・北条氏の方が少なくない？ ・敵が多すぎでしょ！ ・そういえば秀吉が北条氏を倒したんじゃないかった？

北条軍約6万 VS 秀吉軍約22万の戦いだったことを伝える。

- ・えー！？勝てくない？
- ・いくら何でも無理でしょ？
- ・降参！
- ・いや、勝てるっしょ！
- ・北条氏の戦い方ならいけるんじゃない？

小田原城包囲図を見て、気づいたことや考えたことを話し合おうとする。【関】

攻撃されることなく、3ヶ月の間この状態が続いたことを知らせる。

このときに秀吉軍は笠懸山（石垣山）に一夜城を築き、茶会を開くなどしていたことを伝える。

- ・え？3ヶ月って長くない？
- ・何してたの？
- ・なんで戦わないの？
- ・北条軍は何してたの？
- ・迷ってたんじゃない？
- ・相談してたんじゃない？
- ・ああ、評定衆が何でも話し合ったんだよね。
- ・小田原評定だね。
- ・どんな相談をしていたんだろうね。
- ・茶会って、秀吉軍余裕じゃん。
- ・秀吉はなんで攻めないの？

北条氏は3ヶ月もどんなことを話し合っていたの？⑥（本時）

北条氏の話し合い（小田原評定）について話し合おうとする。【関】

戦おう

- ・作戦を立てよう
- ・今回も籠城すれば大丈夫
- ・総構があるから大丈夫
- ・相手が弱ったら攻めよう
- ・100年も守ってきた小田原城を渡せない
- ・人々のためにも戦おう
- ・こんなにいいまちを渡したくない

様子を見よう

- ・仲間が来るのを待とう（徳川、伊達との同盟）
- ・相手が弱るのを待とう
- ・もう少し待てば引き返すかも

北条氏の小田原や民衆に対する思いに気づくことができる。【思】

戦わない

- ・勝ち目は無いから逃げよう
- ・囲まれているから逃げられない
- ・もうあきらめよう
- ・降参しよう
- ・せめて自分たちを信頼してくれた人々の命は助けたい
- ・人々の命は助けられるかも

・結局3ヶ月後にはどうしたの？

児童の様子によって、小田原城を明け渡したときの資料を配る。

3ヶ月間悩み抜いた末、農民や領民のことを考えた決断を下したことがつかめるようにする。

- ・結局降参かあ ・氏直ってすごいね ・やっぱり最後まで小田原の人々のことを考えていたんだ！
- ・北条氏が築いてきた小田原のまちは壊されなかったんだね ・北条氏にとってもよかったかもね
- ・戦国時代が小田原で終わったってすごい！ ・秀吉が天下を統一したってこと？

豊臣秀吉はなぜ3ヶ月も攻めなかったのだろうか？⑦

資料を的確に読み取って秀吉の業績について理解することができる。【技】【知】

○秀吉ってどんな人だったんだろう？

人物像

- 百姓出身の武士 織田信長に仕える 信長のことを慕っている
- ・百姓が全国統一ってすごっ！ ・織田信長に仕えたんだよ

やったこと

- 関白、太政大臣になる 大阪城築城 太閤検地 刀狩り 朝鮮出兵 信長の敵討ち
 惣無事令 — 北条氏はこれに違反したから秀吉に攻められた
- ・秀吉って頭がよかったんだな ・検地って北条氏もやってたよね ・朝鮮出兵は調子に乗りすぎたね
 - ・秀吉の政治もどこかで終わるんだよね ・この後はどうなるのかな？

7 実践を終えて

(1) 子どもとどのように単元を作ってきたか（本時まで）

歴史の学習では、その時代を動かした「人物」や当時を生きた人々の思いと歴史的事象を関連づけることを大切にして学習を進めてきた。第1時では、戦国時代に入ると、その「人物」がとても多いことに子どもたちは驚いた。その中に、子どもたちにとって身近でよく耳にする小田原北条氏がいることへの気付きを元に本単元の追究を始めた。また、総合的な学習の時間で千葉県から修学旅行に小田原を訪れる館山小学校の6年生に小田原城を案内したいという学習活動とも関連づけることで、高い意欲をもって学習に入ることができた。

初めに北条氏について知っていることを出し合った。北条五代祭りや北条早雲などが出てきた。子どもたちは、北条氏が五代にわたって小田原を治めたことは知っていても、乱世において100年間を治めたことの偉大さには気付いていなかった。そこに気付いたとき、なぜそんなに長く小田原を統治できたのか、どんな「人物」が統治したのか、早雲以外のよく知らない「人物」についても知りたいという思いが生まれた。そして「北条氏ってどんな人たち？」という問いをもって次時からの調べ学習へと入っていった。

第2時から第4時にかけて北条五代について調べ学習を進める中で、北条氏が長く続いた理由として、戦いが強かったことや家督争いがなかったこと、職人や商人を集めて産業の発展を促したことなどを見つけていった。特に、領民を大切にされた政策については子どもたちはとても関心をもち、北条五代がどのような人たちだったのか考えを巡らせ、北条氏への愛着を深めていた。そういう中で、善政をしき、領地の拡大も順調だった北条氏がなぜ歴史の表舞台から姿を消したのか、「北条氏はどうやって終わったの？」という疑問が生まれた。豊臣秀吉の小田原征伐について知っていたり調べ学習の中で触れていた子どもたちもいたが、詳細については第5時に調べることにした。

北条氏の最後について調べていくと、秀吉率いる大軍に囲まれたにもかかわらず、3ヶ月もの間膠着状態が続いたということがわかった。そして、ここで2つの問題が生まれた。「3ヶ月も北条氏は何をしていたのか？」と「なぜ秀吉軍は3ヶ月も攻めなかったのか？」である。秀吉の問題はこの後の単元へのつながりとし、ここでは、北条氏の行動を問題とした。評定衆のことについてすでに調べていた子どもたちにとって、話し合いを重ねていたのだということは、容易に想像できた。その一方で、「3ヶ月も!？」という驚きとともに「何をそんなに話し合っていたのか？」という問いをもつに至った。これまでに調べ、読み解いてきた北条五代の人物像や政治の仕方などと関連づけて、一人ひとりが自分の考えをもち、本時へ臨んだ。

(2) 本時での様子とそこから見えた成果と課題

前時に自分の考えを整理する時間をとったこともあり、自分の考えを伝えたい思いが活発に意見を述べる姿に表れていた。さらに、仲間の意見に対しても、「ああ、なるほど。」「それに関連して…」「そういうことか。」といったつぶやきや、自分の考えと異なる意見に対して「え？それってさ…」「それに対して…」といった批判的な意見を聞くことができた。

これらは、子どもたち自身が解決したい問題がはっきりしていたことによる成果だといえそうだが、それ以外にも、北条氏について一人ひとりが高い意欲をもって、納得がいくまで調べていたことの成果だったと考える。身近な学習材であったこと、総合的な学習の時間との関連が明確だったことが子どもたちの意欲を大いに高めた。さらに、単元を通じて子どもたちの思いを大切に、彼ら自身がもった問いをつないで学習を進めていったことは、子どもたちが毎時間「今日は〇〇をする。」とねらいを明確にして学習を深めることにもつながった。さらに、必要感をもって調べ学習に臨むことで、情報量が多かったにもかかわらず、意欲的に調べる姿があった。また、調べ学習にあたっては、資料を精選、整理して用意することで、個人差に対応することができた。資料の提示についても、クラス全体で見ると、個々の手元に置いてじっくり読み込むものに分けて準備したこともよかった。

こうした学習の積み重ねにより、自分の考えを大切にしようとすることや仲間の意見に耳を傾け、それに対する自分考えをもつことにつながったと考える。

話し合いの中で、子どもたちは「籠城を続ける。」「降参する。」「攻める。」「逃げる。」などといったことを、根拠をもって伝え合っていた。そういう中で、本時のねらいに迫る、「領民を大切に考えていたから。」という意見やつぶやきも出ていた。本時の終盤、補助発問として「北条氏が一番大切にしていたことって何だろう。」と投げかけ、学習感想を書いたが、多くの子どもたちが「領民をどう守るか。」ということを大切にしていたのではないかと考えをもっていた。他にも、「こんなにいい国を失いたくない。」「自分たちでないと、領民がまた苦しい思いをしてしまう。」といったことを書いている子どももいた。

本時の流れの中で、「北条氏が一番大切にしていたことって何だろう。」という補助発問が必要だったかという反省が残った。子どもたちから十分に北条氏の領民に対する思いがあふれている中で、「自分だったらどうする？」という発問であったならば、その領民への思いを大切にしつつ、行動決定する模擬体験を経て、子どもたちは北条氏の思いへ近づいたのではないかと思う。子どもたち自身が言葉を紡ぎ、気づき、学んでいくための教師の出所についてさらに研鑽が必要と感じた。研究協議において出された、「北条氏はどうやって終わったのだろう。」という問いに戻るということも改善策として有効だと思う。今後を生かしたい。

(3) ひびき合いについて

ひびき合いについては、先にも述べたとおり、受容的なつづやきだけでなく、批判的なものもクラスの中で自然と受け入れられる土壌はあったが、まだまだ耕している段階であった。自分の考えを大切にしつつ、仲間の意見を受け入れることでみんなで学ぶよさを感じている子どもが増えてきていた。また、他者の意見に触れることで自分の考えを捉え直す面白さや大切さに触れている子どもも見られるようになってきていた。そのような中で、単元を通して批判的な意見を大切に扱い、「違うと思ったら言ってもいいんだ。」という文化がクラスの中に醸成されてきたことは大きな成果だった。それによって、伝え合うことで学びが深まることを実感した子どもも多かった。

単元を子どもの問いで計画したことで、少し複雑で質・量ともに難しさのある学習内容だったが、一人ひとりが前向きに取り組んでいた。調べ学習が充実し、調べたことを根拠に解決したい問題にみんなで向き合うという流れが子どもたちにとってとても自然で心地よかったようである。

課題としては、子どものもっている根本的な問いを見失わないようにし、必要に応じて立ち止まり、ときには振り返りながら学びを深めることである。それにより、教師の直接的な問いかけでまとめるのではなく、子どものそのままの思いを大切にしつつ、子どもたち自身の言葉で学習をまとめられるようにしたい。1時間の計画の仕方と補助発問について検討を重ねたい。